中里恒子全集

第十五巻

中里恒子全集　第十五巻
定価二〇〇〇円
昭和五十五年四月十五日印刷
昭和五十五年四月二十五日発行
著者　中里恒子
発行者　高梨茂
印刷者　青木勇
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ八ノ七
電話(五六一)五九二一
振替東京二―三四
検印廃止
©一九八〇

目次

時雨の記　3
厄落し　217
引窓　239
冬夕焼　277
孫の手　301
松虫　323
三丁目で　345
瓢箪　365
百萬　385

あとがき 417
解題 418

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

時雨の記

二階の書斎を下りて、庄田は、しんとした家の中を歩きまわった。敷き替えたばかりの灰色の絨毯の上に、点点と、猫の足跡がついている。老猫の三毛は、池のまわりの湿った土の上を歩いては、すぐ、居間の敷物の上で足の裏を拭くようにして、食堂の隅の椅子の下に座りこむ。

三毛は、小さい時から糞尿の癖がわるくて、三毛の好む場所へ砂箱をおいても、ほかの場所へ尿をする。細君は、泥足を拭くのと、砂箱を移動させて、三毛の気に入るように置きかえ、そこへ三毛をすりつけて、糞尿を教えるのだが、わかったような振りをするだけである。

「牝の三毛は縁起がいいとか言って、左官屋さんが持って来たのですけど、やっぱり似るのかしら、職人衆が、ちょっとその辺で用を達すでしょう、猫だって、見てるのだわ、」

庄田は、元もと、猫ぎらいだが、面倒臭いから、細君の猫可愛がりを、黙認している。

猫も老いて来ると、抜毛がひどく、方方に、猫の毛が抜け落ちているのは、うすぎたない。猫がそばへ来ただけで、毛がまつわりついた。

午後から、下阪中の古い友達の壬生がたずねて来る。壬生は、話したいこともあるし、夕食をともにしたいと言って来た。

「そんなら家へ来ないか、全部出拂って、僕ひとりだ、夕食はお弁当ぐらいで我慢しても、話をきくには、家の方が気らくだろう、」
「そうだな、そうしよう、」
庄田は、壬生の話というのは、ビジネスではなく、個人的のことと直感した。小学校からの仲間で、壬生の家が没落するまでは、同じ町内の一番大きい、古い屋敷であった。
請願巡査の住んでいる、石の門の脇の小家屋の前を通ると、巡査は、昼は出勤しているが、細君が庭に向って、いつも縫物をしていた。子が無いせいか、壬生の友達が出入りするたびに、じろっと見据える。押しボタンがついていて、あやしいと思えば、すぐ母屋へ通報する仕掛になっていると、壬生が言った。物乞、ゆすり、そういう一理窟書いた刷り物など持った連中が、時折来るので、巡査の家で、その應対をする。そこで喰いとめられないと、玄関へゆく前に、ボタンを押す。あとは、書生なり、庭番なりがひき受ける手筈だそうだ。
壬生は、そういう家の次男で、男ばかり四人の兄弟であった。庄田には、妹が二人いたので、壬生の家では、庄田の家へ遊びにゆくことを、あらかじめ禁じていた。中学生の壬生に対しても、女というものと接近することを、いましめていたらしい。……
家族が出かける前、庄田は、言った。
「壬生が来ることになってる、いい弁当でも頼んでおいてくれ、」
「まあ不意だわね、じゃあたし、出かけるのやめましょうか、あなたは、壬生さんによくお世話になるでしょう、」

「いいよいいよ、お前は、悪妻で通ってるのだから、かまわないよ、」
「あなたが売りこんだのよ、悪妻悪妻って、」
「本当じゃあないか、壬生のとこも、相当悪妻だから、かまわんよ、ゆっくり夕食をとって、かまわずにやってくれ、」
「じゃ、悪妻らしくしましょう、三毛には、牛乳かけて、ひき肉の鑵詰と、かつぶしを混ぜて、蠅帳に入れておきます、」
元来、妻は客ぎらいで、酒肴のとりなしなど出来ない女である。たまたま喋べり出すと、客の見さかいもなく、関係もないことをとめどなく話しつづけて、相手を、不愉快にするのが、落ちであった。
庄田は、正面から悪妻と言いたてて、自分のつきあいには、相伴させない。
卓の上に、最中が鉢に盛ってある。茶の仕度も出来て、大きな魔法瓶が、ワゴンに乗っていた。
やがて、壬生孝之助が訪れた。
壬生は、庄田と同年だが、頭髪が灰色がかり、そのせいか、顔色は、桃色に冴え冴えして、ひと頃より若若しく見える。
「近く、ヨーロッパをひとまわりして来る、公用のほかに、私用もある、」
「なんだ、そんなことか、」
「……まあ、三ケ月だから、ちょっと、旅行にしては、長いや、簡単に言うよ、君にも隠していたひとがいる、そのことで、君には迷惑でも、知って貰って、なにかの時、力になって欲しいん

だ、」

庄田は、庭の方に顔を向けたまま、

「たとえば、事故とか、いやなたとえだけれど、連絡とるとか、あとあとのこととか、」

「それもある、しかしまあ、なにか起ってしまえば、それまでだ、僕は、家を出ようかと迷っている、」

「えっ、それは切羽(せっぱ)つまった話だな、いっしょになろうって言うのかい、」

「いや、反対してる、向うは、とめにかかってるよ、だが……僕はようやく今になって、ほんとに生きている気がするんだ、反対させないつもりでいる……」

堀川多江を知ったのは、いや、まだ知ったとは言えない、見ただけだったから、それは、たぶん、あのひとも二十そこそこの頃で、僕は勿論、獨身だったから、何十年前になるかな、そんなことはどうでもいい？　いやそうではない。それから僕たちが再會したのは、あのひとが四十すぎ、僕も五十を過ぎていた。

そんなに長い月日の間、僕たちは、全然、離れていたのに、どこにどうしていたかも知らずに、お互いの運命は、べつべつに人生を辿っていたというのに、僕は、二十そこそこの頃に見たあのひとの面差しを、忘れていなかったのは、やっぱり、一つの縁というものではないだろうか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その日、勤務先の會社と関係深い社長の通夜で、大森の高台の屋敷へ行った。ごたごたしている中で、焼香がはじまったので、僕も、末席に列なる為、離れの大広間の方へまわった。帰りは、庭の方から出るということなので、外套や帽子をもって、離れの渡り廊下を通ってゆくと、入口のひと間に、三人ばかりで、客の持ちものを預っていた、若い女のひとが、

「どうぞ番号札を、」

と声をかけた。僕は外套と帽子を渡し、思わず顔を見合せた。

目礼した顔の、産毛の生えた蠟のような頬と、濃い髪の毛を束ねた無表情の顔に、一瞬きざした赤味もすぐ消えて、帽子がつぶれないようにと、もちものを、急ごしらえの台の上に乗せるべく立ちあがった。

ひょろひょろした躰つきを、わたしは漠然と、なにか非常な重味に耐えているひとのような、理由もない哀感を覚えて、思わず手を差しのべてしまった。

「わたしが乗せましょう、」

そのひとは首を振って、そのまま、ほっそりした躰を伸ばして荷物を片づけ、また、そこに黙って座った。わたしは、そのまま通夜の席にゆき、會社の者といっしょに、奥との連絡に、広間の出口を往ったり来たり、下っ端らしく雑用を手傳ったりする度に、そのひとが、じっと、何處を見るでもなく、伏眼勝ちに座っているのを、何度眺めやったろうか。なんとなく、気になるひとであった。

あとできけば、そのひとは、社長の身内の資産家の三男坊かなんかに嫁いだひとで、平常は、

良人の好みで洋服ばかり着ている、快活なあかるい性質だと言われて、わたしは、あてがはずれたように、がっかりしたものだ。なんだ、そんな幸福な若奥さんなのかと、やきもちに似た、つまりその良人にそういう気さえ感じた。けれども、他人の奥さん、それだけで、もうわたしは、すっかりそのひとに関心を失くしてしまった。その頃は、人妻は、高峯の花、まかりまちがえば、不義密通、駆落、心中と、ろくなことにはならない。ひと眼で好きになったくらいのことが、どう具体的になろう筈もないではないか。

しかし、第一印象というものは、おそろしい。わたしは、堀川多江が、四十すぎて、その間にいろいろの出来ごとがあって、身の上が変っていることなど、思いもよらずに、昔のままの、蠟のような頬が、ふっくらしているのを見たとき、はっと思った。

「あのひとだ、あのひとに違いない、」

わたしたちが再會したのは、知人の息子の結婚式の席でしたよ。従って、あのひとは紋付を着て、派手やかに粧っていたのに、わたしには、何十年か前の、あの故しれぬ哀感が、まざまざと蘇ってねえ。

偶然なことに、テーブルが向いあっていたので、わたしは、話しかける機會を窺っていた。どういうわけか、主人らしいひとも居ず、わたしも、妻を同伴しなかったので、ひとりの男と、ひとりの女を向いあわせて、何組かのカップルの中に入れたのは、係りの組み合せの気轉だったにすぎないが。

戦後の帝国ホテルで、これだけの客をしたのは、製薬會社をもっている知人の、顔の広さもあ

り、家柄のよさもあり、招かれた客も、すぐに、どこそこの誰彼とわかる顔ぶれが多くて、わたしも、財界の端に顔を出している関係で、デザートになると、早速、三、四人の知人と、話し合いながらも、あのひとが、いつ、席を立つかと、気が気ではない。

そのうち、立ち上って、主人公の方へ行きかける気配だったので、わたしは、友人をおいて、いそいであのひとのそばへ行った。

「お忘れかと思いますが、以前、大森の……」

わたしは、名刺を出した。

「壬生孝之助さまで……はい、大森は伯父の家でございますが、まだ嫁いでまもなくの頃で、」

「お通夜の席で、広間においでになった、お忘れでしょう、当然です、わたしは覚えておりました、」

「申しわけございません、若い頃からのぼんやり者で、失礼いたしました、」

「……お送りいたしましょう、どちらへでも、」

わたしは、有無を言わせず、そのひとに寄り添ってクロークへゆき、そのひとがコートを着ている間に車を呼び出して、押し込むように乗りこませた。我れながら、強引だと思ったが、今、ここで手離したら、手がかりがなくなるという性急な気で、とうとう、思ってもみなかった犯人をつかまえたような態度に、すらすらとなっていた。

本当のことには、本気になる。

商売、交際、無論のことだが、女に対して、わたしは、こんな親切めいたことを、臆面もなく

押売りしたことがあったであろうか。
「東京駅で結構でございます、」
「お荷物がおありだし、お送りしてはいけませんか、」
「そんなことは……でも、大磯でございますから、」
「大磯ですか、それではやっぱり駄目ですな、もっとも駄目なことはありません、お送りしましょう、」
「いいえ、電車の方が、らくでございますので折角のお志を無にするようでございますが、」
「……」
「ありがとうございました、」
わたしは、突然、またも、飛んでもないことを口走った。
「大磯のおところには、明日、お伺いしてもよろしいでしょうか、」
多江は、おそれとも、怒りとも思えるような表情で、一瞬、眼を見張り、
「どうして、明日お出でになりますの、」
「どうしてって、」
「おもしろいことを仰言いますわ、大磯の山側の方で、古いところでございます、」
「おもしろいことでしょうか、わたしの言うことは、どうも、おかしい男だと、」
「率直で、珍らしい方だと思いました、こちらこそ失礼いたしました、」
ぱっと車を下りて、わたしの車が走り出すまで、舗道に立ってあのひとは見送っていた。わた

しは、引き返したいような気になった。そして、よし、明日は行く、そうきめた。明日は、日曜日である。

雨でも風でも行くと、きめてしまった。

思いたったら是が非でもということは、人間、なにかとありますよ、釣好きが川で果てたり、ギャンブル狂が、女房を質においてもという眼のいろの変り方、わたしは、庄田君も知っての通り、男のくせに小さい時から、いろんな稽古ごとをやらされた。水泳、柔道、茶、絵画、書、一つぐらいものになるだろう、暇があるのはいかん、怠惰はいかん、車夫馬丁でもいい、一番の馬丁になれという主義で、びしびしやられたものだ。

ところが、長兄の定之助は、弟三人とは区別された存在でね、幼時から別室で育てられ、水泳はしたが、柔道で、耳でもつぶしたらいかんと、させなかったし、茶と書はしたが、絵画は、どういうわけか習わなかったね、その代り、兄の為の家庭教師が住みこみでいて、学校の勉強は勿論、外国語も、英獨をやらされていた。医者になるわけでもないのに、何故獨逸語をやったのかわからないが、恐らく、父親の学問好きの犠牲だろうか。学者と言えば、むやみと尊敬してね、関係方面の学者を手厚く後援してましたよ。

家の跡を継ぐ長男は、すでに幼時から、一種の帝王学のような、特別の場に座る人間として躾けられていたから、わたしのように、学校の勉強をきらって、君たちと、いたずら遊びに余念なく熱中する、溢れるような野放図な性格ではなかったね。

きちんと、わくの中で、最上に仕立てられて、それを守り得た、やっぱり抑制の利いた男だと

思わないか。君たちは、兄に出會うと、硬直して、神妙に振舞っていた。つまり、目下の者を、平等に扱う、特に、誰が好き、これが嫌いと、自己を出すことを禁じられ、ひとでも、ものでも、それについての喜怒哀楽を露骨に表現することは、小さい時からしなかったよ、いわゆる八方丸く穏かに取締る風格ある余裕を、どんな場合にも失わない人間として、躾けられていたから、到底、僕たちの、おもしろい遊び相手ではなかった。

わたしは、兄のような人間にはなりたくなかった。わるい奴だと言われても、したいことはかまわずやって見る、失敗しても、やりたいことはやった方がおもしろい、そういう、慾望に満ちた生き方にあこがれたものだ。

まあ、自分に関係のない話は、一應おあずけだ、とにかく、再會した翌日、わたしは、あのひとに會った嬉しさだけで、わくわくと會いに行ってしまった。

會ってどうしようなんてことは、考えなかった、昨日會った、明日も會いたい、それだけのことでねえ。どうして昨日會ったから、また今日も會いたいというのがおかしいのか、わたしは合点がゆかない。

そりゃあ、會いたくないひとには、幾日會わなくてもいいのさ、けれど、堀川多江とわたしが出會ったのは、最初も偶然、再會も偶然なんですよ。

ところがそのあとは、偶然なんてものではない、わたしは、會いたい衝動にかられて、それが、常識に反しようが、多江が、どんな境遇にいるのかもわからずに、ただ、會いたいから行ったのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com